冬に咲く花は何よりも美しく

タカ@使者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
冬に咲く花は何よりも美しく

【Ｎコード】
Ｎ３３９８Ｆ

【作者名】
タカ@使者

【あらすじ】
周りからはヤンキーと言われていた冬地。自分はそうではないと言い張るが、周りの目は厳しい。自分はいったい何をやっているのだろうか。このままの自分でいいのだろうか。冬地は自分の理想と周りの目との差に戸惑い苦しんでいた。そんなある冬の寒い日、冬地は公園である女性に出会う。それが冬地を変える運命の出会いだったのである。

第1話「ヤンキー」

「お前らはほんとにどうしようもない奴等やの！」

俺は生徒指導の先生に怒られていた。生徒指導室に入るのはもう慣れている。

なぜ俺が生徒指導室にいるのかというと、問題を起したからだ。

別に俺達が一方的に悪いわけじゃない。相手にだって悪いとこはある。まぁほとんど俺達が悪いんんだが。

でも大人はそんなことわかっちゃくれない。俺達の日頃の行いが悪いとか、見た目がどうとか、そんなことで理由も聞かずに決めてしまう。

俺たちは周りからすればヤンキーと言われるらしい。俺はそんな気はない。ヤンキーの定義なんてのもわからないし、いったい何をすればヤンキーなのか。そんなことまったくわからない。けど大人たちは俺たちを毛嫌いする。

それに俺は見た目はヤンキーなんかとは違う気がする。髪の毛も黒に染めたし、服装だってちょっとチャライだけだ。それに部活だってずっとバスケをガンバってきた。「人間は中身だ！」って言う人がいるけど、ほとんどの大人はそうじゃない。ちょっと目つきが悪いだけ、公園で集団で溜まってる、ちょっといじったバイクにのってる。それだけで距離を置かれてしまう。

今回の暴力事件もそうだ。初詣を終えた俺たちはバイクでコンビニに向かった。俺たちがいつも利用しているコンビニ。店長とは仲がよくて、いつもくだらない話をしている。でも元旦とあってか店長はいなく、最近入った３０代前半の男性店員だった。
俺たちはローソンでお菓子とジュースを買って、ローソンの前で屯（たむろ）ってた。それはいつもの日常だった。でもあるお客の言葉に俺のダチが怒った。それは日常ではなかった。

「元旦からこんなとこで騒いで、ホントヤンキーって・・・」

まぁそんなこといつもの事だった。

「何見とんねん」

俺のダチが一言威嚇した。これもいつもの事だ。普通の客ならそこで呆れるかビビって無言で店に入る。けど今回の客はそうでなかった。

「元旦からようやるなぁと思って。ほかの客の迷惑だとは思わんのか？」

まぁこの人の言うことは間違ってない。

「は？」

健二は気が長いほうではなかった。立ち上がって男の前に行った。

「お前には関係ないやろ？女の前やからっていきんなや」

「おい健二、元旦からそう熱くなんなよ」

亮太が止めに入ったが、健二は亮太の手を払い男の顔の真正面まで顔を近付けガンを飛ばした。

「まぁ俺には関係ないけどな」

男は彼女が一緒にいたからか、それともビビったのかわからないがその場を立ち去ろうとした。そこで何もなければ俺が生徒指導室に呼ばれることはなかった。

「おい、今のわざとやろ？調子のってんちゃうぞ」

男が去るときに少し強く健二に肩が当たった。俺にもあれはワザとの様に見えた。気の短い健二がそれを黙って見過ごすわけない。健二はその男の胸倉を掴んだ。その時中にいた店員が出てきた。

「お客様！困ります店の前で！」

店員は健二とその男の間に割って入った。その店員が店長なら問題はなかったんだ。けどその店員は先に俺が言ったような大人だった。店員は男に頭を下げて謝った。そして男は、まぁしかたないですよ、といった顔をして店に入っていった。そこまでは普通の行為だ。けど次の瞬間俺も腹が立った。

「君たち困るよ、ただでさえ君たちみたいなのが店の前にいるだけでイメージが悪いんだからさ。問題とか起さないでくれる？今日のところは学校とかには言わないであげるからさ」

言わないであげる？何様だよ。俺も若干キレそうだった。でもここでキレたら大人の思うツボだ。

「もうええわ、行こうぜお前ら」

俺は早くこの場から立ち去りたかった。これ以上元旦にイライラしたくなかったからだ。けど最後が悪かった。「タツトリ、アトヲニゴサズ」って言葉があるのをご存知だろうか？　健二が店の前のゴミ箱を蹴飛ばしてゴミを散らかした。最悪だ。まぁ結果それで俺達が生徒指導室にいるわけだ。文章で書けば俺達が一方的に悪いように見えるかもしれない。けど実際はそうでもないわけだ。

俺はイライラしながら生徒会室を出た。怒られるのは本当に腹が立つ。健二達に帰りにマクドに行こうと誘われたが俺は断わって帰ることにした。あいつらは意外にサバサバしている。怒られ終わると何かスッキリしてすべてを忘れてまた元通りになる。実にうらやましい。でも俺はそうではない。

俺は1人学校を後にした。

第2話「TUBAKI」

俺は公園にいた。家の近くの公園だ。小さな公園で利用してるのは俺くらいか、犬の散歩コースとして使われているだけだろう。
この公園の滑り台は俺の特等席だ。寝転びながら日が落ちていくのを眺め、そして星を眺める。それが俺の日常になっていた。ここから聞こえる音、ここから見えるもの、ここで感じる事。すべてが俺を慰め、励ましてくれる。なんか嫌な事があれば必ずここに足を運ぶ。俺はいつものように近くのローソンでタバコを買った。そして積もってる雪を払い、滑り台に座った。

眩しいくらい紅く燃えた日が山に沈んで行く。その光景は切なくもあり優しくもある。夕日の光が積もった雪に反射して光っている。

俺はタバコに火をつけた。むしゃくしゃした時はタバコに限る。俺は煙を空に向け吹いた。俺はいったい何をやってるんだろう。ここに来るといつもそんな事を考える。確かに今が楽しいのは事実だ。でも俺は今の生活に満足しているのだろうか？　いつものダチといつものように絡む。いつものような日常を繰り返し、そして死んでいくんだろうか。

ワンワンワン

犬の声がした。そろそろ犬の散歩の時間だろうか？俺はそんなことを考えながら滑り台に寝転んだ。すると俺の視界が急に影になった。それと同時に俺の顔の前に犬の顔が来た。

俺は驚いて飛び起きた。

「こら！ダメでしょ小太郎！」

犬は飼い主に呼ばれて俺の元から離れた。

「すいません。だ、大丈夫ですか？」

綺麗な女の人だった。ニット帽から茶色いロングヘアーでが出ている。そしてマフラーを巻いていた。

「あ、大丈夫ッスよ」

俺はタバコの火を消しながら返した。

「この子ったら急に走りだしちゃって」

「ハハハ、俺結構犬に好かれるタイプなんすよ」

「ハハハ」

笑ってくれた。すごく素敵な笑顔だった。

「柴犬ッスか？」

「ええ。名前は小太郎。まだ子供だからワガママで」

小太郎は綺麗な毛並みの犬だった。可愛らしい目をしている。

「お前小太郎って言うんか～」

俺が触ってやると気持ちよさそうな顔をした。

「滑り台の上で何してたの？」

彼女はそう俺に聞いてきた。黄昏れてました、なんて恥ずかしくて言えない。

「ちょっと疲れたんでイップクしようかなって思って」

「イップク…君それ学生服だよね？」

学校の帰りだったので俺は学ランを着ていた。

「それにさっきタバコの火を…」

学ランでタバコ。まぁ普通に考えたら良くない組み合わせ。まだ１８の俺はタバコを吸っていい歳じゃない。俺の周りじゃ吸ってない奴の方が少ない。けど大人からすればそんなこと関係ないのだろう。俺は何か言われるのを覚悟した。言われても仕方ないことなのかもしれない。

「タバコは体に悪いからあまり吸っちゃけないよ？それにその服のままじゃ見つかっちゃうよ？学校とかに」

意外な答えだった。テッキリ何か嫌味を言われるかと思った。それにたとえ何か言わなくても、大人たちは目で俺達を牽制する。ゴミを見るような目で俺達を見る。その目が俺が１番嫌いな目だった。でも彼女はそんな目ではなかった。本当に心配してくれているような目だった。

「あ、はい…気をつけます…」

俺はちょっと不意をつかれてキョトンをしていた。

「あれ？怒られると思った？」

「え、あ、いえ。呆れられるかと。」

すると彼女は笑った。

「アハハハ。タバコを吸うくらいで呆れないわよ。それに人間見た目じゃないでしょ？」

そう言って彼女は俺にウインクをした。

「小太郎が懐いたんだもの。悪い人じゃないってわかるわ」

不意打ちだった。変化球を要求してたのにすっぽ抜けた１５０ｋｍのストレートが来たみたいだった。

「そろそろ行くわね」

俺は必死に何か言葉を考えた。なんでもいい。何か言葉が欲しかった。

「あ、あの！　お名前はなんて言うんすか？」

俺の精一杯の言葉だった。というか初対面の人にイキナリ名前を聞いていいもんなのだろうか。俺は自分で言ったのにも関わらず、後悔していた。

「お、俺は冬地(とうじ)です。冬の地って書きます」

俺から名乗っていた。頭の中が混乱していた。

「素敵な名前ね」

「そ、そんな事ないッスよ…」

自分が何をいっているのかもわからなかった。

「私の名前は椿(ツバキ)、なんか苗字みたいでしょ？」

「そんなことないッスよ」

俺は何回同じ事を言っているんだろうか。

ともかく、俺は冬の寒い日に1人の女性に出会った。

そして俺は冬の寒い日に恋をした。

第3話「恋」

俺は家に帰ってからも虚ろだった。頭の中では椿さんが浮かび続ける。俺は恋してしまったんだろうか。

考えてみたら恋をしたのは久しぶりだ。数日前まで彼女はいた。だがそれは恋ではなかった。
一つ下の後輩だった。夏休みに告白されて付き合っていた。告白されるまでその子の事は何も知らなかったし、学校で見かけた事もなかったのだ。

なぜそんな子と付き合ったかって？　それは俺にもあまりわからなかった。告白されて嬉しかったし、その子も可愛かったし。なんとなく、それが正しい言い方かもしれない。相思相愛で付き合うなんてごくまれな事だと思っていた。

それもあってか俺が恋をするのは久しぶりな事だった。
俺は飯を食ってる時、風呂に入ってる時、ベランダでタバコ吸ってる時も彼女の事を考えていた。
俺が今知っている事は、彼女の名前が椿ということ。彼女は柴犬の小太郎を飼っている事。それだけだ。

少なすぎる情報。もっと知りたい。そういう感情になるのは人間として当たり前の感情だろう。俺は何か胸躍らせ眠りについた。

ドサッ

屋根の雪が地面に落ちる音で目が覚めた。

外を見てみると雲ひとつない澄んだ空だった。今日は晴れだ。

俺は時計に目をやった。時計の長針は5を、短針は8を指していた。今日は日曜日だ。特にすることはなく、家でボーッとしてるかゲームをしているかの休日。正直俺は休日は好きではなかった。学校に行って、ダチと絡んでるほうがよっぽど楽しい。生憎、健二や亮太は土日はバイト。なので俺一人暇人なわけだ。

俺は食卓に行き朝食の支度をした。俺の家は親父と俺と姉の3人だ。母さんは俺が5歳の時に死んだ。交通事故で死んだらしい。俺はまだ5歳であまり記憶が鮮明と残っているわけではない。でも、葬式の日に姉ちゃんが「あんたは私と父さんがしっかり面倒みてあげるからね」と言って抱きしめてくれた事はよく覚えている。けど姉ちゃんはもう結婚して家を出た。親父も仕事が忙しくてほぼ単身赴任だ。なのでこの家にいるのは俺だけ。寂しいって感情はどっかに捨ててきたらしい。あんまりそう思うことはない。でも時々思う時があるんだ。

健二の家は家族皆仲がいい。短気で喧嘩っ早い健二だが、小さい妹がいるせいか家では至って温和だ。それに家では姉貴に逆らえないらしいからな。健二は家で一人の俺を気遣ってか、時々晩飯に誘ってくれる。俺は健二の言葉に甘えて、時々ご馳走になっている。その時健二がおばさんとかと楽しそうに話しているのを見るとき、家で一人で食ってる事を思い出すと寂しくなったりもする。

俺はパンをトーストに入れて、お湯を沸かした。朝はパンが楽でいい。一人しかいないのにご飯を炊くのもめんどくさい。俺はソファーに座った。テーブルの上に一枚の写真が置いてある。母さんと最後に撮った写真だ。海遊館の前で写っている。茶色い髪の毛が風に揺れていて、母さんは麦藁帽子を片手で押さえて、俺と手を繋いでいる。姉ちゃんは俺の横でピースをして笑っている。微笑ましい家族の絵なのだろうか。俺も姉ちゃんも母さんもすっげぇ笑顔だ。

チン

パンが焼けた。俺はバターとジャムを冷蔵庫から出してパンに塗った。ちょうどお湯も沸いた。インスタントのコーヒの豆を入れて、砂糖を入れてお湯を注いだ。実にセレブな朝だ。

俺は休日の朝をのんびりと過ごした。

第４話「その綺麗な絵は」

俺は鍵を閉めて家を出た。

暇なので近くのタバコ屋にタバコを買いに行くことにした。近所とはいっても歩いて１０分のところだ。婆さんが１人でやってる小さなタバコ屋。ボケてるのか学ランで買いに行っても売ってくれる。俺達にとってはいいんだが、法律的にはダメなタバコ屋である。

俺は雪道を進んでいった。靴がビショビショだ。

大阪では珍しく一昨日は大雪だった。もう２日間も積もったままだ。大阪では滅多に雪が積もる事はない。１年に２、３度積もる日があればいい方だ。そのせいかはわからないが、この歳になっても雪を見るとテンションが上がる。今日もちょっといつもよりテンションが高い。

タバコ屋に着くといつものお気に入りのタバコを買った。そして封を開けて１本取り出した。そして火を点けようとした時、後ろから声がした。

「あ、昨日体に悪いから止めた方がいいよって言ったのに」

聞き覚えのある声だ。

俺は振り返った。そこにいたのは椿さんだった。

「つ、椿さん！」

俺は口からタバコを落とした。

「あ～もったいない」

と言いつつも椿さんはタバコを上から踏みつけた。タバコと一緒に椿さんの靴も雪に埋もれた。

「封印！」

そういって椿さんは笑った。

椿さんの笑顔はいつ見ても最高だ。

「あれ？今日は小太郎と一緒じゃないんスか？」

椿さんは小太郎を連れてなかった。その代わりに大きなプラッチックのカバンを持っていた。

「今から大学だからね」

そう言いながら椿さんは雪から足を抜いて雪を手で払っていた。

「その大きな荷物は？」

俺は目でプラッチック製の大きなカバンを見ながら言った。

「あ～これはね～」

そう言いながら椿さんはカバンを開けて中から何かを出した。

「私が今書いている絵なの」

真っ白な雪野原だった。奥のほうにポツンと小屋が建っている。本当に綺麗な絵だ。

「すげぇ、めっちゃ上手いやないですか」

俺は鳥肌が立った。素朴な絵ではあった。でもそれ以上にすごく綺麗だった。

「まだ完成してないの。何か足りないんだけど、それがわからなくてね」

才能ってのはこういうモノなのだろう。俺には完璧な絵に見えた。でも椿さんは何か足りないと言う。そこら辺が違うのだろう。

「あ、いけない！遅れちゃうから行くね」

そう言って椿さんは絵をカバンに入れた。大学…。椿さんは大学生だ。また一つ椿さんを知ることができた。

「じゃぁね冬地君」

椿さんはそう言って歩き出した。

「あ！椿さん！」

俺は椿さんを呼び止めていた。椿さんは何かしら？　という顔でこちらを見た。

「今日…小次郎の散歩行きますか？」

俺はとっさに聞いてた。

「もちろん」

椿さんは微笑んだ。

俺はその後ルンルン気分だった。また夕方椿さんに会える。そう思っただけでうれしかった。

こりゃ重症だ。

第5話「悪夢」

俺はルンルンで家に帰った。最高な気分だった。また夕方に椿さんと会える。俺は勢い良く家のドアを開けた。

あれ？

なんでドアが開いているのだろうか？

確かに閉めていったはずだ。

家の中には親父がいた。

「なんや、親父帰ってたッ」

俺が言葉を全部言う前に親父が声を張った。

「春子が、春子が交通事故に合った！」

俺はすんなり理解できなかった。

春子、俺の姉ちゃんの名前だ。確かに親父は姉ちゃんが交通事故に合ったと言った。交通事故と言っても度合いがたくさんある。でも親父の慌てようは尋常ではなかった。

「何ボサッと立っとるんや！その服のままでええ！行くぞ！」

俺は親父に連れられて病院へ向かった。

車の中親父は時計ばかり気にしている。

「なぁ親父、姉ちゃんが交通事故に合ったって、大丈夫なん？」

「わからん、さっき剛史君から連絡があってな。とにかく急いでくれやそうや」

俺は心配はしてた。でも姉ちゃんの事だ。平気な顔でベットに寝ている。そう思っていた。

車が病院についた。親父が先に下りて姉ちゃんのトコに向かった。俺は車を駐車場へと運んだ。車を停め俺は足早に病院へ向かった。2階の集中治療室だ。エレベータを待つ余裕がなかったので、俺は一気に階段を駆け上った。階段を上り終えるとそこに剛史さんと親父がいた。2人はガラス越しに何かを見ていた。

俺も2人の所へ行きガラスの向こうを見た。

そこには管のいっぱい刺さった姉ちゃんがいた。俺の目には大丈夫そうに見えた。傷もそれほどないみたいだ。

「春子の容態は？」

親父が剛史さんに聞いた。

「まだ…。先生が話してくれはるらしいですけど」

そこに白衣を着た先生がきた。

表情は硬い。

何か後遺症でも残るのだろうか。

「見ての通り、外傷はいたって軽傷です」

俺は安心した。

「ですが…」

俺の安心も長くは続かなかった。

「肋骨が肺と心臓を貫いています。中はもうボロボロの状態です」

「おそらく…持って後1時間でしょう」

剛史さんが床に崩れ落ちた。親父も顔を抑えた。

俺は目の前が真っ白になった。

「おい…1時間ってどういう事やねん！お前ら医者やろうが！治せよ！姉ちゃんを治せよ！」

俺は先生に掴み掛かった。無我夢中だった。

「治せよ！治せ治せ治せ治せ治せ！！！！」

涙が止まらなかった。

すると親父が俺の肩を持って、俺の思いっきり殴った。

「先生になんて事するんや」

親父の顔はぐしゃぐしゃだった。涙と鼻水が垂れていた。俺も床に崩れ落ちた。

姉ちゃんが死ぬ…。

それから1時間後、先生の言った通り、姉ちゃんの心臓は止まった。剛史さんはずっと姉ちゃんの側で何かを語っていた。親父は親戚中に姉ちゃんの死を伝えるのに忙しかった。携帯と、公衆電話でひたすら電話していた。
俺はずっと休憩所で座っていた。

いろいろと思い出していた。姉ちゃんとの思い出を。姉ちゃんが家を出たのは俺が中3の時だった。それまではずっと俺の母親だった。参観日も姉ちゃんは部活を休んでまで来てくれた。懇談も来てくれたし。

楽しい思い出がすべて一瞬にして崩れさったようだった。

途中警察の人が来ていた。姉ちゃんは横断歩道で車にひき逃げされたらしい。大通りではなかったため目撃者が少なく、犯人はまだ捕まっていないらしい。

ほんとうなら俺はそんなこと許せず、怒っていたと思う。

でも怒る気にもなれなかった。

体の力が全て抜けて、何も考えられなかった。

数時間前まで最高だった日が、最悪になった。

俺は休憩所のソファーに倒れた。

第6話「八つ当たりという名の恥」

「冬ちゃん、冬ちゃん起きて」

俺は誰かの声で目が覚めた。薄っすら開けた目の先には黒い髪のショートヘアーの女がいた。

「さっきおじさんから聞いて飛んできたんよ？」

楓だ。俺の幼馴染で家が隣同士だ。そのせいか仲が良くて、ガキの頃はしょっちゅう遊んでいたらしい。

「春子お姉ちゃんのこと聞いたで。辛かったやろ・・・？でもこんな所で寝てたら風邪引くで？」

楓がマフラーを巻いてくれた。

「楓・・・俺・・・」

目から涙が落ちる。

「ええんよ、泣きたいときは泣き。ウチだって悲しいもん」

楓の目からも涙が落ちた。俺は泣き続けた。誰もいない待合室に俺と楓の鳴き声が響いた。

どれくらい寝ていたのだろうか。外はもう夕焼けだった。長い間眠り続けていた。姉ちゃんとの思い出が夢の中にたくさん出てきた。俺は夢中で泣いた。

「親父は・・・？」

俺は辺りを見渡した。

「おじさんはいったん家に帰ったよ。春子さんと一緒にね。冬ちゃんを起こさなかったのは多分今はゆっくり休めってことやと思う」

俺は涙を拭いた。

「すまんかったな楓。わざわざありがとうな。もう大丈夫やから・・・」

俺はマフラーを楓に返した。

「冬ちゃん、一緒に帰ろ？おじさんからタクシー代預かってるから」

俺は歩き出した。

「ええわ、俺歩いて帰るし。その金で楓は帰り」

「歩いて帰るって家までどんだけあると思ってるん！」

俺は振り返らず歩いた。

「ほな、ウチも一緒に歩いて――――」

「来るな！」

俺は声を上げた。

「一人にさせてくれ。頼む・・・」

俺は病院の廊下を一人歩いた。

一人になりたかった。

誰かと一緒にいたくなかった。

優しさに触れたくなかった。

外に出ると雪が降っていた。

雪を見るといつも嬉しかったのに、今日は悲しいだけだった。

神様なんかこの世にはいない。

いたとしても何もしてくれない。

姉ちゃんを救ってくれない。

「ちくしょう！」

俺は落ちてる空き缶を思いっきり蹴った。八つ当たりだ。ほんとにダサイ。でもどんどん悔しさが込み上げてくる。

「何してんねん！」

声がした。

すると目の前に金髪でピアスだらけの男とリーゼントの男が立っていた。

「お前の蹴ったカンカンが当たったんですけど」

「すんません・・・」

俺は小さく謝った。

「聞こえへんのぉ」

「すいません・・・」

俺はまた謝った。正直どうでも良かった。関わりたくなかった。しゃべりたくなかった。

「んな小さい声じゃぁ聞こえへんって言っとるんじゃ！！！」

リーゼント男が声を張り上げた。

俺はリーゼント男の頬をおもいっきり殴った。

「イチイチうぜぇんだよ！絡んでくんなボケ！」

リーゼント男の鼻からは血が出ていた。

「お前！何しとるんじゃ！」

ピアス男が俺の頬を殴った。

「いってぇな・・・何すんねん！！」

俺はピアス男も殴った。そして倒れているピアス男の胸倉を掴んだ。

「お前らみたいなクズに、俺の気持ちがわかんのかよ！」

俺はまた殴った。俺の目からは涙がこぼれた。俺は泣きながら殴り続けた。

ドン

俺は一瞬意識が飛びそうだった。

リーゼント男が俺の後頭部に蹴りを入れたのだ。俺は立ち上がってやり返そうとしたが、もうフラフラだ。立つのがやっとだ。俺はフラフラしながらも殴りかかろうとしたが、こんなんで勝てるはずがない。リーゼント男が俺の腹に蹴りを入れた。俺は地面に倒れた。

意識が朦朧(もうろう)としていた。

俺のこのまま死ぬのかな。

でも死んだら姉ちゃんのトコにいける。

俺はこのまま・・・

「冬地君！」

聞き覚えのある声がした。

けどもう意識が限界だった。

何か話してる。

「この子は私が預かります」

俺の意識はそこで飛んでいた。

第7話「現実的言葉」

俺は何かの揺れを感じて目が覚めた。

後頭部が痛い。

俺は後頭部に手をやった。コブができている。

俺は車の中にいた。

「気がついた？」

俺は運転席に目をやった。

そこにいたのは椿さんだった。

「つ、椿・・・さん？」

「よかった気がついて」

倒れる前に聞いたあの声は椿さんの声だったのだ。

「ビックリしたのよ？車であの道を通ってたら歩道で冬地君が喧嘩してるんだもの」

「あいつらは？」

俺はそれが気になった。椿さんは怪我してないだろうか？

「ちゃんと話して謝ったから大丈夫よ」

俺は安心した。椿さんに被害はなかったようだ。

「何があったの？あの人たちの話を聞くと冬地君が悪そうに言ってたけど・・・」

「俺が・・・俺が悪いんです」

そうだ。俺がすべて悪い。空き缶が当たったのは事実。それで怒る

のは当たり前だ。それに俺から手を上げた。

「お姉さんのこと、さっき電話で聞いたわ」

「でんわ・・・？」

「冬地君の電話に楓ちゃんって子から何度も電話があったから勝手に出させてもらったわ」

楓が心配してくれてかけてくれたのだろう。

「俺・・・なんかむしゃくしゃして、悔しくて。自分が何も出来ない事、姉ちゃんが死ぬのをただ待つことしかできなかったことが悔しくて・・・」

「それで喧嘩したってこと？」

俺は返す言葉がなかった。その通りだからだ。

「ハハハ・・・最悪ッスよね俺」

その時俺は椿さんになんて言って欲しかったのだろうか。慰めてほしかった？　同情して欲しかった？　多分優しい言葉を待っていたのだろう。

「そうね、最悪ね」

俺は何を期待してたんだろう。俺のやったことは最悪な事だって自分でわかってるのに。でもどこかで椿さんは自分の辛さをわかってくれるって軽い期待をしてたんだ。けど現実はそんな甘温いものじゃなかった。

「どんな理由があろうとも、人を傷つける事はダメなこと」

なんでかわからないけど、そんな事を言われるのは慣れていた。生徒指導にも、担任にも、サツにも、幾度となく言われ続けていた。けど、椿さんにその時言われたのは重く俺にのしかかった。

「18歳でタバコを吸っていようが、お酒を飲んでいようが、そんな事はなんでもないの。でも人を意味も無く傷つける事は絶対許せないことよ」

「冬地君のお姉さんは今の冬地君を見たらなんて言うかしら？」

姉ちゃんが今の俺を見たら・・・・

俺は返す言葉がなかった。

「大切な人が死んだことはとても悲しい事だとは思う。けどそれを胸にしまって、その人の分まで頑張らなきゃいけないのよ」

俺は俯(うつむ)いた。

「今、それを冬地君に理解しろってのは少し大変な事かもしれないけどね・・・。家まではまだかかるからもう少し寝てていいわよ」

俺は横になった。

悔しかった。さっき感じたのとは比べ物にからないくらい悔しさが込み上げてきた。自分がやった事を。こんなの、ヤンキー以下だ。

俺はゆっくり目を閉じた。

そして俺は眠りについた。

「もしもし、私。仁はいるかしら？」

「――――」

「そう、じゃぁ仁に伝えておいてくれないかしら？　至急調べて欲しい事があるって」

第8話「静かなる誓い」

目が覚めるといつも知ってる天井が見えた。

俺の部屋の天井だ。

「最悪ね――――」

椿さんの言葉が頭に過ぎった。

ガチャ

ドアを開ける音がした。

「冬ちゃん、起きてたんだ」

楓がお茶を持って入ってきた。部屋が暗くてよく見えなかったが、楓の顔はとても悲しそうな表情に見えた。

「楓・・・すまんかったな心配かけて」

「ホントやよ・・・心配してんから！」

いつもの楓の顔だった。俺の勘違いだろうか。

「椿さんって人が電話に出てくれたんよ。冬ちゃん連れて帰ってるからって」

「椿さんは？」そう聞きたかった。けど今は会いたくなかった。合わせる顔がない。

「椿さんがね、今はあの子の側にいてあげて、やって。せやからウチが側におるから！」

そう言って楓は俺の手を握った。

「ちょっとはウチを頼って？ウチだって冬ちゃんになんかして上げたいもん」

必死だった。その時の楓の表情はとても印象的だった。俺はちょっと恥ずかしかった。

「うるさいわ・・・。別にお前になんかしてもらわんでも俺は大丈夫やしな！」

「フフッ」

楓が笑った。

「何笑っとんねん」

何がおかしいのかわからなかった。

「いつもの冬ちゃんに戻ったなぁ～って思って」

いつもの俺か・・・。

みんなの目には俺はどう映っていたのだろうか。何もしらねぇ大人達の目じゃなく。俺をちゃんと見てくれてる人たちの目には、俺は

どう映ってるんだ。楓や親父。剛史さんや健二や亮太。そして姉ちゃんの目には俺はどう映っていたのだろうか。

「最悪ね――――」

また椿さんの言葉が頭を過ぎった。

正直、椿さんとは出会ってまだ間もない。そんな人が俺のあんな行為を見たら・・・。

俺はまた悔しい気持ちになった。

楓は家に帰った。帰ったといっても隣だ。また来ると言ってた。

俺は一階に降りた。

床の間に布団が敷かれ、そこに姉ちゃんが寝ていた。その横に剛史さんが座っていた。

剛史さんは俺に気付いたのかこっちへ来た。

「冬地、こいつと話をしたってくれへんか？こいつしゃべるん好きやったやろ？」

そう言って笑顔で俺の肩を叩いた。

「俺はタバコ吸ってくるわ」

剛史さんは玄関を出て行った。

剛史さんは元暴走族だ。大阪では有名な族のヘッドだった。顔もよくて男気が合って。正にかっこいいという言葉が似合う人だ。俺達の間でも有名な人で、憧れの存在だった。

姉ちゃんは、初めは剛史さんを知らなかった。告白したのは剛史さんからだった。いつも女の子に囲まれていた剛史さんが俺の姉ちゃんに一目惚れしたのだった。それから剛史さんは族を止めて真面目に働いて、何度も何度も姉ちゃんにアタックした。姉ちゃんもその熱意に惚れて二人は付き合うことになった。そして結婚まで至った

のだ。

結婚して2年。

剛史さんは最愛の人を亡くした。

俺以上に悲しんでる人がいる。

俺は床の間に入って姉ちゃんの横に座った。そして顔の布を取った。

本当に綺麗な顔だ。

俺は言葉が出なかった。

言いたい事、話したい事がたくさんったのに。

「綺麗な顔しとるやろ？」

剛史さんだった。吸いに行ったのはいいがライターを忘れたらしい。

「俺な――――」

剛史さんは俺の横に座って語りだした。

「こいつに残りの人生預けてええと思った」

剛史さんはタバコに火を点けた。

「お前も知っとるやろ？俺がこいつに一目惚れしたんや。こいつと一生一緒にいたい。そう思った」

その時姉ちゃんが結婚式に言っていた剛史さんのプロポーズの言葉を思い出した。

『お前に俺の地図を預ける。寄り道や回り道にも付き合う。お前と進める道やったらおれはどこでもええ。お前が横にいてくれるんやったら』

俺はその時は、キザやなぁ剛史さん、って思ってた。

けど剛史さんはマジでそれを言ったんだ。そう今思った。

「俺は、正直コイツ無しには生きていかれへん。そう思った。けどな、こいつが死ぬって聞いてからの一時間、コイツの側におって思ったんや。これは春子の分まで生きる！ってな。そして自分のできる事をするってな」

一緒だ。椿さんが車で言っていた事と。

その人の分まで生きる。

そして自分のできる事をする。

俺の頭にある事が過ぎった。

姉ちゃんはひき逃げに合ったんだ。

犯人はまだ捕まっていない。

「剛史さん、犯人・・・まだ捕まってないんスよね」

「ああ、目撃者も少なくてな。警察が捜査してくれとる」

俺は立ち上がった。

「冬地よせ。そういうことはポリや俺らに任せといたらええねん」

ほっとけって言うのか？サツに任せとけ？

待ってられるか。

「目撃者探しとかは俺らがやる。お前はまだ若いんや。今は自分のことを精一杯してたらええんや」

若い？若さってなんだよ。俺も悔しいのは一緒だ。

「お前には未来がある。その為の今があるんや。今は後悔せんように生きたらええ」

「後悔なんかやったあとにすればええんですよ！俺は今自分がしたい事をするんです！」

静かな部屋に俺の声が響いた。

「冬地・・・。わかった。せやけど条件がある」

剛史さんはそう言ってタバコの火を消した。

「お前は今のお前の時間の暇なときにするんや。学校やいろんなことまで犠牲にすんな。それは俺と春子からのお願いや」

俺はしゃがんで姉ちゃんの手を持った。

「俺、がんばるよ」

俺はそこで姉ちゃんに誓った。

第9話「極道の人」

俺は焼香に来る人に頭を下げていた。

親戚の人、姉ちゃんの職場の人、姉ちゃんの同級生。いろんな人が来ていた。

「冬地、姉貴さんのこと残念やったな」

健二だ。学ランのボタンを上まで閉めていた。

「お前がボタンを上まで閉めてるのめずらしな」

「冬地君、いつでも家に来てええからね？」

健二のおばちゃんだ。ハンカチで涙を拭きながら健二の肩を持った。

「はい。ありがとうございます。お言葉に甘えてまた行かせてもら

います」

俺は深々と頭を下げた。

たくさんの人が来ていた。俺の学校の先生も来ていた。

俺は涙が出た。

みんな姉ちゃんの事を見送りに来てくれたんだ。

いろんな人が姉ちゃんの遺影と棺の前で手を合わせてるのを見て俺は涙した。

俺は涙を拭いた。

泣かないって通夜の前に決めたのに。

俺はハンカチを持ってないので学ランの裾で拭いた。

「これ使って？」

誰かが俺にハンカチを差し出してくれた。

俺が顔を上げるとそこには椿さんがいた。

「ご冥福をお祈りいたします」

椿さんが親父に頭を下げた。

「冬地君。辛いと思うけど頑張ってね」

俺は無言で頷いた。

すると椿さんは微笑んでくれた。

そして俺の頭を撫でて去っていった。

「親父、ちょっと俺出かけてくるわ」

俺は式場を出た。

通夜は無事終わり、明日の葬式を待つだけだった。

俺はあの場所に向かった。

辛いとき、悲しいときにいつも行くあの場所だ。

俺は夜道を一人歩いて公園へ向かった。

公園につくと滑り台に誰か座っていた。

誰だろうこんな夜遅くに。

俺は滑り台の下まで行った。

「あれ・・・どこに置いてきたんだ」

何かを探してるのだろうか？　でも俺はすぐに火を探してるのだとわかった。火のついてないタバコを咥えていたからだ。

「火、貸しましょか？」

俺は声をかけた。

「あ、すいません。じゃぁお借りします」

俺はライターを出して火を点けた。

「ありがとうございます」

いくつくらいだろうか？　黒い髪が肩までである。黒いスーツを来ている。なんかホストみたいな格好だ。

「こんなトコで何してるんスか？」

男は煙を吐き出し答えた。

「さっきまでここで人と会ってましてね。その人は帰ったので少しイップクしようかと」

滑り台の上でイップク。俺と同じ事を考える人だ。

「君はここで何を？」

「俺もここでイップクしよかと」

男は、「一緒ですね」と微笑んだ。優しそうな顔の人だ。サラリーマンだろうか？

「君は・・・学生さんかな？」

男が聞いてきた。

「あ、はい。高校生ッス」

俺もタバコに火を点けた。

「タバコは体に悪いですよ」

自分も吸ってるくせによく言う。

「そうよく言われるんです」

そう言って男は笑った。

「私は橘（たちばな）仁（じん）。君は？」

「俺は冬地です。冬に地面の地って書きます」

「いい名前ですね」

それからしばらく無言が続いた。何を話したらいいのかわからない。

「あ、仁さんは社会人ッスか？スーツ着てはるしサラリーマンかなと」

仁さんは軽く微笑み、

「ん～どうでしょう。少し説明しにくい職業なんですよ」

俺はますます興味が湧いた。

「それに、簡単な説明で言ってしまうと印象が悪いんですよ」

印象が悪い？どんな職業なのだろうか？

「大丈夫ッスよ。別にどんな職業でもビックリしませんし、印象悪いとかないッスよ」

「そうですか？そうですね～簡単に言えばヤクザって言うのがわかりやすいでしょうか」

俺は言葉が出なかった。ビックリしませんと言った手前、驚くわけにはいかない。

「へ～そうなんッスか」

内心ビックリしまくりだった。

極道だ。本物のやーさんに会ったのは初めてだった。

「皆さんヤクザには悪い印象が多くて。確かにガラの悪いやつらも

いますけど、全部が全部そうじゃないんですよね」

俺は椿さんに初めて会ったときの言葉を思い出した。人を見た目や周りの目で見ちゃダメだ。

「わかってるッスよ。人を周りの目と一緒に見たらダメだってことは。俺はなんかヤクザの人のほうがちゃんとした人多いと思うんですよねそこらへんのチンピラと比べたら」

仁さんはすこしキョトンとしていた。

「冬地君は私のよく知る人に似ています」

そう言って笑った。

「お近付きの印にこれをどうぞ」

仁さんは名刺を取り出した。最近のやーさんは名刺を持っているのだ。

近衛組
橘　仁

そう書かれていた。質素な名刺だ。

「あ、ありがとうございます。俺名刺とか持ってませんけど・・・」

仁さんは微笑んで、

「構いませんよ。高校生で名刺など必要ないですしね。では私はそろそろ帰りますね」

「火、ありがとうございました」

そう言って仁さんは滑り台を降りて歩いていった。

変わった人だった。

ヤクザには見えないし、なんか独特の雰囲気の人だった。

俺は煙を空に吐いた。

月が綺麗に光っていた。

第１０話「どこかで・・・」

家に帰ると、剛史さんがカップ麺を食べていた。

「おう、おかえり」

剛史さんはスープを一気に飲んで台所へ洗物に行った。

俺はリビングのソファーに座った。

「剛史さん、近衛組って知ってます？」

一瞬剛史さんの洗物の音が途絶えた。俺は振り返ろうとしたが剛史さんが答えた。

「あ～知っとる知っとる。関西じゃ有名な組やなぁ。それがどないしたんや？」

俺は仁さんのことを話そうとしたが止めた。

「いや、ちょっと聞きたかっただけッス」

話してもよかったのだが、何か引っかかった。何かはわからないけどそうすることにした。

携帯を見るとメェルが一件届いていた。

Ｆｒｏｍ　亮太
Ｓｕｂ　Ｒｅ２：

冬地、今日の通夜に行けなくてすまんかったＴｘＴ　ちょっと用事があってな・・・。事故のこと健二から聞いたで。俺もなんか手伝える事あったら言ってや。まぁ俺の場合情報集めくらいしかでけへんけどな＝ｘ＝　まぁ今はゆっくり休めよ～。

嬉しかった。こういう時に本当に友達を大事にするべきだと思う。亮太が手伝ってくれるのは正直助かった。

情報化社会

情報が自由に行き交うこの世界では、如何に正しい情報を迅速に知ることができるかが鍵となる。そんな中亮太は最強だ。蜘蛛の巣の

ような情報網を持っている。誰が誰を好きかという小さなことから、族などの内部情勢や行動なども手に取るように知っている。そんな亮太がいてくれれば犯人などすぐに捕まる。

そう思ってた。

間違ってはいなかった。

間違っては・・・

姉ちゃんの葬式は無事に終わった。悲しかったけど、俺は泣かなかった。変わり果てた姿の姉ちゃんを見たときは涙が出そうだったけ

ど、俺は耐えた。悲しいけど、悲しんでるだけじゃ何も始まらない。そんな気がしたんだ。

「剛史君、良かったら家で一緒に住まないかい？」

親父が剛史さんと話していた。俺も剛史さんが一緒に住んでくれると嬉しい。

「ありがとうございます。せやけど今は仕事もあるんで気持ちだけ受け取っときます」

俺が「なんで？」って顔をすると剛史さんは、

「せやけど寂しかったら寄せてもらうかもしれません」

そう言って微笑んだ。

親父も長い間休んでたので仕事にすぐ向かった。また独りになった。けどもう独りじゃなかった。姉ちゃんがどっかで俺を見守ってくれてる。そう思った。

俺は姉ちゃんの遺影に手を合わせてあの公園へ向かった。

第１１話「肉まんと遊園地と椿」

俺は公園の滑り台の上にいた。

この上から見える景色は何一つ変わらない。変わるのはその景色を見ている俺だけだ。

「やっぱりここにいたんだ」

声がした。

俺は起き上がって滑り台の下を見た。

「ヤッホー」

椿さんが笑顔で手を上げた。

俺は何て言えば良いのかわからなかった。あの一件依頼会うのが気まずかったからだ。

「あ、どうも」

そっけない返事をしてしまった。すると椿さんは、

「あ、なんだなんだそのツレナイ返事は！！せっかく差し入れを持って来てあげたのに」

そう言ってコンビニの袋を差し出した。

「いいよ～私独りで食べるから」

「あ、ちょ、俺も食べますって！」

おれは滑り台を滑って降りた。

椿さんはコンビニで肉まんを勝買って来てくれたのだ。ホクホクで温かい肉まんを一つ貰った。本当に温かい。

俺は椿さんと二人で肉まんを食べた。

「そういえばずっと気になってたんスけど、椿さんって関西弁じゃないですよね？」

俺はずっと疑問だった事を聞いた。

「私は東京で育ったからね。今はおじいちゃんの家で住んでるの」

「やっぱ大学はこっちのに行きたかったからこっちに？」

椿さんの言葉が詰った。何かいけない事を聞いてしまったのだろうか。

「お父さんもお母さんも私が１８の時に死んじゃってね」

申し訳ないことを聞いてしまった。

「そう今の冬地君の時よ。だから冬地君の気持ちはわかるんだけどね…。私もそうだったから冬地君には前を向いてほしくて」

俺は最悪だ。

椿さんがどんな気持ちで言ってくれたのかもわからず、ただ言われた事にショクを受けて…。

「椿さん、俺前向きに生きますよ。悔やんで立ち止まっても何も始まらないッスからね」

俺はそう言って微笑んだ。

「そうだその意気だ冬地！」

そう言って椿さんも微笑んだ。

「あ、そうだ冬地君、今度の日曜日って空いてる？」

「え！？」

俺はビックリした。まだ何も椿さんは言ってないのに、俺はあたふたしている。

「どうしたの？」

椿さんが驚いてる。

「私の知り合いから遊園地のチケットを貰ったんだけどね、私行く人がいなくてね。それでこれが次の日曜日までのチケットなの。だから冬地君行かないかなぁって思って」

俺は舞い上がってた。

「行きます行きます絶対行きます！」

椿さんは少しキョトンって顔をしたがすぐ笑って、

「良かった。じゃぁ今週の日曜日の朝１０時に駅前の熊の像の前でね」

俺は帰り道ウハウハだった。

これは正しくデート！？

俺はスキップで帰った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3398f/

冬に咲く花は何よりも美しく

2010年10月10日01時01分発行